

# 2007年、大学・短大“全入”に！？

## 志願者 = 入学者 69.9万人。当初予測より2年早まる

旺文社 教育情報センター 16年7月

高等教育の将来構想(グランドデザイン)等を審議している中央教育審議会の大学分科会はこのほど、18歳人口、大学・短大への進学率の動向など、審議の基礎資料となる将来の高等教育の規模を試算した。それによると、大学・短大への志願者数は2007年には約69万9,000人まで減り、当初予測より2年早く“全員入学”になるという。

<定員拡大と現役志願率の伸び悩み等で、“全入”早まる>

当初予測:大学審議会(大学分科会の前身)は1996年10月、「2000年度以降の高等教育の将来構想」において、2009年度までを視野に入れた高等教育構想を提示した。その中で、大学・短大の臨時定員、即ち「臨定」を全廃せず(国立大は2001年度から撤廃)2004年度まで段階的に解消しつつ、1999年度規模の5割を「恒常的定員」とした場合の大学・短大への志願者数、入学者数等を試算した(下図の棒グラフ参照)。それによると、2009年度には大学・短大の志願者数70万7,000人(現役志願率62.9%)と入学者数70万7,000人とが一致し、“全入”になると試算していた。

見直し:当初予測から8年経ち、入学定員が予測をはるかに上回っていることに加え、現役志願率の伸び悩み(2003年度は前年度比0.4ポイントダウンの55.7%)や、進学率の頭打ち状態など、受験環境の予想外の展開で、当初予測を見直す必要に迫られたわけだ。中教審では今後、試算データ等を検討しながら、高等教育の将来構想の中間報告を8月頃に取りまとめ、年内～年明けを目途に最終答申の予定である。

